

第4回森林再生実行会議 議事録（要約）

令和3年12月26日（日）13：30～15：30

あがたの森 2-8 会議室

（香山）

第4回森林再生実行会議では、どんな報告書を作成するのか、来年度に向けての課題、第5回森林再生実行会議をどんな形にしていくのか、議論していきたいと思う。

報告書は昨年度の森林再生会議の提言に対応した報告書にしていこうと考えている。

提言をそのまま引き写して、一つ一つの提言の項目ごとに作成するのではなく、提言書の中からどこを重点的に取り上げるのかという重み付けをしていく必要がある。

そのため直ちに動く必要があるのは、第4章「人材と組織」で、今年の会議の大きな課題でもある、松本市森林再生市民会議のあり方について議論する。

（小山）

参加する市民には、森林・林業に対し、一定の知識や理解、いろんな人の話を自分で分析できる能力を持っている方でないと、市民会議で意見を発言することができない。

市民を増やすために、山ゼミのような形で、正しい知識を身に付けてもらう場が必要。また、その知識を基に、自分自身で考える場も必要。

このことから、市民会議開催前に、市民会議を動かすためのシステムを構築する必要がある。

（香山）

市民会議自体が決まったことを承認する会議ではなく、政策と一緒に作っていく会議にしていくために、政策作りの枠組みにおける市民会議の位置付けや役割を示していく必要がある。

（三木）

市民会議は、森林の長期ビジョンを決める合意形成の場。

ただし、長期ビジョンが、森林計画など市の他の計画等と具体的にどうしていくのかが分からないため、示していく必要がある。

（香山）

長期ビジョンが関連しているのは、松本市森林再生会議の提言書に記載された各項目が該当している。

しかし、提言書は森林法に基づく市町村森林整備計画や策定済みの計画に関連を付けて記載していないため、具体的な枠組みまで市民会議で決めていくのか、又は提言書の各項目に沿って、最低限の枠組みでマスタープラン化するのか、どちらが良いか。

(小山)

市でやっている会議の中で、地区の松くい虫対策協議会では、松くい虫の問題が反映されている。

そのため、今回決めていくマスタープランとあまり離れているということはよくない。長期ビジョンと策定済みの計画は一定の関係性があるべきではないかと思う。

(渡辺)

松本市民や松本市に関わる方々が森林・林業に関して興味や関心を持ってもらい、知ってもらうことが大切ではないかと思う。

(香山)

市民会議は、長期ビジョンを作ると言いながらも、まず市民会議の土台である、知る場を作ることも役割になる。

(小山)

松本市は、博物館や図書館、公民館、美術館といった多くの学び場は存在するが、それぞれが個別に動いているため、森林という横軸でまとめることで、総合的な学び場の機会が増えるのではないか。

(渡辺)

松本市は学ぶ場が多くあるが個別に動いているため、うまく連携をとることで、知る場を増やすことや関係性を深くすることができる。

(香山)

市民会議は、それぞれ専門的に活動されている方や市民、組織を繋げる場や学ぶ場を担うことができれば面白い。

また、岳都・松本山岳フォーラム「山ゼミ」では、社会教育活動として、森林・林業のプロが市民と交流していくことを行っているため、そういったことも市民会議に繋げていきたい。

(三木)

森林を市民の日常に近づけていくことが、森林再生の要であると感じる。

そのために、市民が十分な興味や知識をつける学び場を作る必要があり、その場を誰がどうやって行うのかが、今回の会議の課題だと感じる。

(香山)

学びたい気持ちを起こさせる、きっかけはどんなことか。

(小山)

知る場を作る前にそもそも興味を持ってもらうことが必要で、興味を持って知る場に来

てもらふ人を増やすには、市民が自発的に面白そうって思えることがあるのではないか。

(渡辺)

松本市内でも木に関わる人がたくさんいるので、森林に対する興味は薄いですが、木が好きだから木材製品を利用している人を繋げて、会話を持たせることで、興味を持つ人が増えていけばいいと思う。

(香山)

森林再生市民会議に参加する人を募集し、会議を本当に動くものにするには、興味の地盤づくりが大事である。

森林再生市民会議は、興味を作るところから始まって、知る場を作るという活動なのか、それとも別の仕掛けで回していくエンジンが必要なのか。

(小山)

今、興味もない、知る場もほとんどない中で、エンジンを与えても点火装置がないと動けないので、エンジンは市民会議にして、点火装置は一生懸命考えなければいけないが、それは実行会議委員で責任を持たざるを得ないのかなと思う。

(香山)

これだけの森林があって市民がいて、潜在的なニーズがあるのでどうやったら点火できるか、そこに点火していく仕掛けが必要。それは市民会議が担うか、一部に取り込むのか、今やっている実行会議が継続してそこだけ担うのか悩ましい。

(三木)

点火装置は市民会議がやっていく必要があり、その構成はこの森林再生実行会議で考えなければと思う。

(香山)

日本中のほとんどの市町村森林整備計画は、流域計画の中でその一部を担うみたいな作られ方をしている、ほとんど県が主導している。

それに対して、市町村は公告をし市民や関係組織の意見を聞くというふうになっている。そんな作られ方だったが、そこに市民会議がコミットしていく可能性は考えられるか。

(小山)

市町村の計画と流域の計画が合わなければ、おかしいと言うのは本来市町村の役目。

松本市から市の森林整備計画を立てたので、これに基づき私たちの森林はこうしていきますということを流域計画の中に入れていく。それから次の計画までにこういうところを意識してくださいというふうに協議することで、流域計画への波及になる。

(香山)

長野県の例でいうと、森林づくり条例があって、さらに森林づくり指針というガイドラインがあるが、これと市町村森林整備計画はほとんどリンクしていない。

どんな森林を作るのか、市民が影響を与えていくところに市民会議の役割があれば、影響を与えられるような気がする。

(三木)

長期ビジョンと関連づけるべき市の森林の姿や、市民が森林を利用する在り方を決めている計画や、指針があるのか。

(小山)

木材を使うということでの何らかの計画があれば教えて欲しい。

(事務局)

具体的な施設に提供する計画は、今のところないが、木材利用に関する方針を作り、目標としては掲げている。

(香山)

公共施設木質化の関係は、一般的に市民に知られる形になっているのか。

(事務局)

ホームページに方針という形で公表している。今後も進めていく予定にはなっているが、今のところ具体的な計画はない。

(三木)

公共建築物木材利用促進法は、民間の建物もなるべく木質化していこうと今年法律が改正された。松本市の全体の姿を決めていく重要なシーンになっていくと思うので、そこへ市民が意思を反映させることは価値がある。

(香山)

松本市は森林の在り方のビジョンを描くことをあまりやっていない。

安曇野市は里山再生プランを作りあげており、その実現のための市民参加の勉強会が、一つのきっかけとして林業事業者との関わりや、公共施設への市有林の材の使用までがうまく循環している。

(三木)

地域で森林のプランを立てようとしても、いいアイデアが出づらいが、地域おこしの

プランをたてると森林のことが入ってくる。

そういったところを市民会議と繋げれば面白い。

(香山)

業者向けの長野県産材利用のマッチングツアーというものがあつた。フィールドは松本だったと思う。

結構、いろんなものが事業者側でも行政でも動いている。

(渡辺)

栃木県では地産地消の家づくりなど県産材の木を取り入れる活動が行われていた。

松本でも実際に県産材を利用して小中学校の机やいすを、身近にある木を取り入れていたということを目にしたことがある。

(香山)

県産材マッチングツアーは、業者向けに長野県林務部で企画、サポートして行つたが、これに市民がどう繋がっていくか見えない段階であつた。

そこに市民会議があれば会議に集まるだけのものとは違つたものになると思う。

(三木)

合意形成をしてビジョンを決めていくには、市民会議を定例的にやる必要もあると思う。

また、会議に参加している人たちで、日常的に意見のやりとりするようなプラットフォームのようなものも必要ではないか。

(香山)

プラットフォームの運営は行政が担うのか？常設の市民団体又は法人としてのNPOが担うのか？

(小山)

運営にやりがいを持つ人を作ることは難しいので、今回委員同士で行つたように、定例会議の間は、ネットワークの掲示板など自分たちで繋ぐことが、現実的ではないか。

また、プラットフォームはデジタルの世界でいいのではないか。

(香山)

市民のプラットフォーム的なやりとりとは別に専門の人達のやりとりも必要。

そのコーディネーターはやはり行政ではないか。

(小山)

森林側と市民を繋ぐ意味の専門職は、行政組織にとっては得意ではない。

(香山)

森林の政策と市民を繋ぐコーディネーター役は現実問題として、市民側からでないとなれない。

(渡辺)

市民主体の会議にしていくには、伊那のフォレストカレッジのような、行政がやる部分と市民がやる部分、関わり方のバランスが大事。

(小山)

バランスをとっていくためには市民会議の一員として役所の人も含め、何が出来て何ができないかを発言していくべき。

(三木)

市民会議に参加する人達が現場を見に行くような、自発的に学ぶことが出来れば面白い。

(香山)

みんなが自発的に動けるわけではないので、旗を振る人も必要。

来年度出来上がった市民会議として動くのではなく、メンバーを固定せず、市民会議を作りながら動いていくのもいいのではないか。(行政が流動的に動くことは可能なのか)

(小山)

核になるメンバーはしっかりと置き、そのうえでゲストを招くなど、車座にして学び合っていくのがいい。

車座の企画責任者は、市が任命する必要がある。

(香山)

今年の実行会議は当初からゲストを呼べるようになっていたが、そういうタイミングがなかった。

あと1回会議があるので、ゲストを呼んで対話ができればと思う。

(渡辺)

第5回会議は木を使っている飲食店などで生配信をし、リアルタイムでお客さんとして来ている方にコメントをいただくなど、1カ所だけでなく多くの場所で意見が交えられるような形がいいのではないか。

(香山)

結局1会場だけだと人が集まるのに限りがあるので、多角的にすることに賛成。

(小山)

今日出てきた一番外側のような話題を提供いただきながらやっていく方法もいいのではないかと考えている。ネットワークを駆使する他に森林から離れている方たちをゲストで会議に招き入れ、一緒に会議をするのもいいのではないか。

そういった会議を実現させるために第5回をキックオフ会議としてやるのも一つの手だと考えている。

(香山)

最終報告について、第5回会議に読むテキストとして、外部にも事前に公開しておき、それをみんなで読みながら議論すれば面白い。その結果が、今年度の森林再生実行会議の報告になっていくイメージがある。

(三木)

開催方法も予めゲストは何人か決めて、お呼びしたほうが良い。

(小山)

会場は、あがたの森文化会館で良いと思う。ここをベースにしてもっと人を呼びたい場合は講堂も使う。

(香山)

文化財の中で会議をやるのは、市役所の会議室でやるよりもイメージがいいし発信力もある。

(小山)

(会議の進め方について) 自分たちのたたき台に対して、いろんな意見をいただいて、その意見をきちんと反映していく、すべての意見を肯定しながらどう組み込んでいくかということになる。

(三木)

まずは意見いただきたい人の日程を確保して、案内を送らなければならない。

(渡辺)

会議に参加者を呼ぶためには、SNSの活用など様々な工夫が必要だと思う。

(香山)

第5回会議は、会議ではなくひとつのイベントというイメージで工夫していきたい。

(三木)

市民会議の名前は大切だと思う。催しの趣旨がわかるようなものがあるといい。

(三木)

市民会議は長期ビジョンに対して合意形成していくのが一つの役割だが、参加する人の全員がそれに関わらなくてもいいのでは。それぞれの人の心構えは広く取っても良いのではないかと思った。

(香山)

イメージの発信がすごく大切。なんとなく行政の会議だという感じになると来る人は限られる。ある程度ゆるい雰囲気にするのは行政の工夫で、どんなことなら法的に可能か検討できれば面白いのではないか。